



ラグビーフットボール部優勝とAグループ昇格の報告



SMAnews をご覧の皆様、大学ラグビーフットボール部監督の山崎です。当部は本年3月より今シーズンの活動をはじめ、先日公式戦日程をすべて終了いたしました。コロナ関連等で試合を辞退することもなく無事公式戦を終えほっとしております。

今シーズンは目標としておりました対抗戦 B グループ優勝、入れ替え戦勝利を達成し創部100周年となる来年度は対抗戦 A グループで戦うこととなります。目標に向けて精進を重ねた部員達はもとよりご家族、学園関係者、スタッフなど多くの方々に支えられて成し遂げることが出来たとあらためて感じております。お世話になった皆様に御礼申し上げます。

昇格をかけた最後の戦いは12月10日(土)、日本体育大学を相手に熊谷ラグビー場で行われました。前半14分にバックスのトライで先行し13対0で前半終了。後半は

相手に得点を許すシーンもありましたが29対17で逃げ切りました。伊藤大吉主将はじめ4年生の気持ちの入ったプレーと抜擢された3名の1年生のフレッシュなパワーが印象に残る試合でした。ご家族、ご友人、ファンクラブ、小中高ラグビー部員、OBなどたくさんの皆様に足をお運びいただき成蹊ファミリーの熱い応援をいただいたことが選手の力となり勝利に結びついたと思います。

来年度は対抗戦 A グループでのタフな試合が待っておりますが更に強いチームを目指し精進を重ね、勝利をつかみたいと思います。皆様の引き続きの応援をよろしく願いいたします。



寄稿 ラグビーフットボール部監督 山崎大樹(85年経卒)

体育会柔道部からの報告 **NEW!!**



成蹊大学体育会柔道部の近況報告をさせていただきます。

ここ数年はコロナ感染症拡大の影響もあり、稽古等の部活動が出来ない時期があったものの、今年は3名の新入部員を迎え、1年生から4年生まで総勢13名の部員が在籍し、週4回の柔道場での稽古を中心に活動を行っております。

成蹊大学柔道部の特徴の一つは、未経験者の新入部員も多いことです。今年の新入部員は3名ですが、そのうち2名は未経験者です。上級生の中でも未経験者として入部してきた部員がいますが、今では黒帯も取得し、東京学生柔道優勝大会等の各大会で選手として活躍しております。柔道部では、初心者も経験者

と一緒に部員全員が成長していく・・・という創部以来のDNAが脈々と受け継がれております。

足元の悩みはコロナ感染症拡大による柔道人口そのものの減少です。部員数の減少はどここの大学でも共通の悩みですが、特に四大学ではその悩みが深刻です。四大戦における柔道大会は学習院大学、成城大学の柔道部員減少によって、ここ2年は開催が出来ておりません。伝統ある四大戦ですので、何とか復活させたいところです。

またOB会との交流も積極的に行っております。今年7月にはOBを招いての稽古見学会と懇親会を開催し、また12月17日の後期納会でも同様のイベントを検討しております。成蹊大学柔道部は2026年に創部100周年を迎えます。現役部員達も、OBの諸先輩方との交流を通じて成蹊柔道部の歴史を感じると共に、講道館柔道の「精力善用、自他共栄」の精神をあらためて感じた次第です。OB会のご支援に感謝しつつ、世代を超えた繋がりも引き続き大切にしていきたいと思っております。



寄稿 柔道部監督 三浦 武彦 (91年法卒)

「箱根駅伝予選会を終えて」



第99回東京箱根間往復駅伝競走大会予選会(以下予選会)が10月15日に行われ、成蹊大陸上競技部としては13年振りに出場を果たすことができました。9時35分に自衛隊立川駐屯地をスタートし昭和記念公園でゴールするハーフマラソンの距離で競われるこの予選会には43大学が出場し、結果は41位(2校は記録無し)でした。

予選会に出場するためには10人が10000mで34分00秒という標準タイム突破しなくてはなりません。この12年間予選会への出場を目指し10人の長距離部員を集めるため勧誘を行い、標準突破を目指し日々の練習に励みましたが、なかなかこの基準がクリアできず出場が叶いませんでした。そんな中、今年は標準タイムの突破の10人まで残り3人という状態からのスタートでした。有望な新入部員が加入し順調に練習を積めていました。しかし、8月に行われた夏合宿でコロナウイルスの感染者が出てしまい、予選会に向け最後の追い込みを行う一番大事な時期に3週間の活動停止を余儀なくされました。各自で練習せざるを得なくなってしまった状況の中、「今年こそは予選会に出場する」という目標を全員が共有できたことで諦めずに各自で練習を続けた結果、申込前日のラストチャンスとなる記録会で4人が標準タイムを突破し、出場を叶えることができました。

13年ぶりの予選会の結果は厳しいものでしたが、事前のアクシデントがあった中、最後まで諦めず全員がゴールを目指し走りきり順位が残ったことは今後につながる大きな一歩であったと思います。皆様もご存じのとおり、1952年に行われた第28回東京箱根間往復駅伝競走に先輩方が出場を果たしています。今年は予選会に出場するという目標を掲げ達成しましたが、今年の標準タイム突破者11人のうち10人は3年生以下でしたので、来年はさらにレベルアップが期待できます。今後はより良い順位を目指すだけでなく、近い将来まずは関東学生連合チームで「成蹊」のユニフォームが箱根路に戻ることを目標に練習に励んでいきたいと思っております。



寄稿 陸友会 幹事長 塚原敦 (83年工機卒)

軟式庭球部 男女とも春・秋リーグ戦連続優勝・昇格！！



体育会軟式庭球部は10月1～2日に千葉県白子町テニスコートで行われた秋期リーグ戦で男女とも優勝し、続く15日の入れ替え戦でも勝利し5部への同時昇格を果たしました。

男子の最終戦は日本大学との試合となり、早々と優勝を決めた女子やOBOGさらには父兄の熱心な応援のおかげで堂々の全勝優勝となりました。

3年ぶりの山中湖での夏合宿は男女30名とOBも加わり充実した練習は技術力の向上とチーム力の強化

が得られリーグ戦勝利の源になりました。秋のOB会は11月12日に開催され10数名のOBに現役の4年生が加わったOBチームと現役との対抗戦が行われました。

祝勝会は6号館地下の「カフェ コミチ」で行われ、スクリーンでのリーグ戦の様子を見ながらの歓談が続き最後は校歌と部歌の大合唱でお開きとなりました。

男女2期連続優勝・昇格の成績は当部始まって以来の快挙で、3期連続を目指して新たな目標を掲げ突き進んでもらいたいと思います。



軟球部 会長 早川 鎮（67年政経卒）

漕艇部『創部60周年記念祝賀会』を開催



来る令和4年12月4日、10号館12階ホールで開催。ご来賓として、江川雅子学園長、森雄一学長、武藤正司成蹊会副会長・常務理事、熊崎和宏学生支援事務室学生部担当課長、山本正基顧問、砂川桂一郎体育会本部委員長、御厨雅宏体育会OBOG連絡協議会会長、小町敏則事務局長が参加。外部から、石丸元国日本ボート協会理事長、芳我孝雄東京都ボート協会会長、学習院桜艇会・輔仁会漕艇部の皆様、成城船頭会・体育会漕艇部の皆様のご参加、ご挨拶を頂戴いただきました。弊社OBOG、現役部員を含め併せて合計

計約100名の方が一堂に会しました。

今回の式典はコロナ禍後、3年振りの12階ホールでの開催とのこと。今までのように、温かい料理や、アルコールでのおもてなしは出来ず、ペットボトル飲料のみ配布となりましたが、当日はコロナ禍でズーム等でのOBOG交流会は開催していたものの、久々のリアルでの開催に会員同士が再会を喜び、当時の思い出話で盛り上がり、新たな試みとして、ズームを使って、遠方にお住いのOBと画面越しで久々に再会、会話を楽しんでいらっしゃいました。また、当日はOBOGのインタビュー動画を放映、歴代ユニホームの展示、書籍・写真の展示も実施。弊部の歴史、活動をご来賓の

皆様にも理解して頂きました。また、1年前から、この日の為に準備をしてきた私や、現役担当メンバーも参加者の皆様楽しんでいらっしゃる姿をみると、こみ上げてくるものがありました。



また、将来、記念式典を控えている各体育会団体のベンチマークになれば幸いです。苦労話は尽きないので、お困りの方がいれば、当方までにご相談下さい。

引き続き、漕艇部に対する応援の程、宜しくお願い申し上げます。

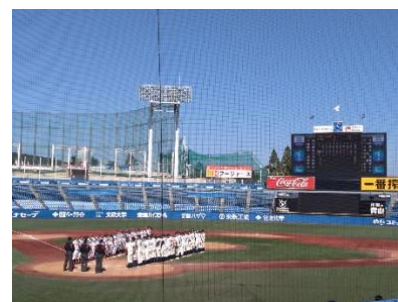
寄稿 漕艇部 OBOG 会 幹事長 朽網宣介 (99年文卒)

硬式野球部は東都大学野球リーグ三部昇格

SMA news 31号(前号)で、秋季リーグ戦の好スタートをお伝えいたしました。その後も全力で戦い続け12勝1敗で優勝いたしました。最高殊勲選手と最優秀投手、最優勝防御率(0.70)、ベストナイン投手に甲斐秀成選手(文4年)が選出され、首位打者(.349)とベストナイン外野手、ベストナイン指名打者に清水亮太選手(法4年)、ベストナイン一塁手に齋藤大輝選手(経済4年)、ベストナイン三塁手に手塚丈一郎主将(文4年)、ベストナイン外野手に上原和浩選手(理工4年)が選ばれております。



明治神宮野球場で行われる入替戦の相手は上智大となり、1回戦を6-1勝利したものの、2回戦を3-6で落としました。11月11日の3回戦は、3回まで完全に抑えられましたが、4回表に1番が粘って四球で出塁し、2番吉澤晴也選手(法2年)が初球を中前にクリーンヒット、3番の三ゴロが相手エラーとなり満塁となります。このチャンスで4番と5番が連続三振、6番も2ストライクまで追い込まれましたが、5球目の際どい球を見極めると6球目がワイルドピッチとなり、ボールが転々とする間に3塁走者に続き2塁走者も一気に生還し2点先制します。その後も粘って三四球をもぎ取り、9番外内混大選手(法1年)のレフト前2点タイムリーヒットでこの回一挙に5得点しました。



このリードをエース甲斐投手が最速142kmの直球と多彩な変化球で守り切り5-2で勝利し、入替戦2勝1敗で今年春以来の三部昇格を果たしました。試合後、部員67名が集合して4年生引退式を行い、最後のシーズンに春の降格を挽回できた安堵と大きなプレッシャーに打ち勝った感動の涙を流しながら、主将が「成蹊大学硬式野球部で過ごした4年間は僕にとってかけがえのない大切な思い出になった」とコメントして快晴の神宮球場を後にしました。

寄稿 硬式野球部 総監督 信太 誠一 (88年法卒)

蹴球部 2022 年度活動報告です



本件の原稿を作成しているさなか、2022年ワールドカップカタール大会で、我が日本代表はベスト8をかけ、クロアチア代表と戦い「新しい景色」にチャレンジ、惜しくも1-1のドローで延長戦、延長でも決着がつかずPK戦で敗退、残念乍「新しい景色」は4年間待つこととなりました。

今回の日本代表は強豪ドイツ、スペインを撃破し、予選リーグでは見事1位で突破「今回こそベスト8」

が現実味を帯びてきたなかでの敗戦だけに、残念である一方で「まだまだベスト8の壁は厚い」「世界の差はまだ埋まらない」と実感した日本代表のワールドカップでした。



さて、我が体育会蹴球部の蹴球部の活動は2021年11月～12月の天皇杯大学予選トーナメント(2次予選敗退)を経て4月から開催されたリーグ戦に注力すべくトレーニングをして参りました。

結果として、22試合9勝3分10敗、勝ち点30で7位となり、新設される関東大学3部リーグへの参入は一步及ばず、残念な来期も東京都1部リーグに残留することとなりました。

この結果を踏まえ、すでに来期にむけて新チームは始動しております。

本年度の反省を糧に是が非でも

関東大学3部リーグへの参入を果たし、スポーツ推薦のない大学のトップとして結果を出したいと思っております。

また、本年度を振り返りますと、目標の関東昇格は果たせませんでした。やはりコロナ禍の環境下で試合が全試合消化できたことは、ひとえにグラウンドの公式戦使用許可をいただいた大学、および関係者各位のご理解があってからこそであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

最後に、OBと致しましても、まずは「コロナ禍における万全な感染対策の励行」を引き続き徹底することにより感染者を出さないことはもちろんのこと、目標達成にむけた準備の確行、そして来期に向けて戦力強化を図り、必ずや関東リーグに昇格できるようOB、現役一丸となって取り組む所存であります。

寄稿 蹴球部OB会長 監督 宮下 尚磨(85年経卒)



体育会本部1年間を振り返って



2021年12月に行われた交代後、私たちは「成蹊大学体育会のための体育会本部を」をビジョンとして、各団体の抱える問題や課題の解決と繋がり強化を目標に活動してまいりました。

同年12月には、繋がり強化や情報発信を目的として体育会本部のホームページを開設しました。2022年2月のリーダーズキャンプではグループディスカッションを行い、参加団体の抱える問題や課題を収集し、それらを取りまとめて学生部に提出させていただきました。しかし、実際には多くの問題を解決できず、悔いの残る1年となって

しまいました。4月には対面形式での新歓活動を開催したことで新入部員数の増加に少しばかり貢献できました。

私たちは学内行事の企画運営にも力を入れました。5月には3年ぶりに学内競漕大会、7月には同じく3年ぶりに学内運動競技大会において球技部門が開催され、企画運営に携わることができました。しかし、ほとんどの本部員がそれら行事に携わるのが初めてだったため、多くの課題が残りました。来年以降は今年の実績を活かし、今まで以上に完成度の高い学内行事を作り上げてまいります。

10月には学習院大学において第73回四大学運動競技大会が開催されました。今年は惜しくも2位になってしまいましたが、来年は成蹊大学が開催校となりますので、今まで以上に正式種目(体育会団体部門)優勝と総合優勝を目指します。

このように1年間を振り返ると少しずつではありますがコロナ以前の活動が取り戻されつつあり、「復活の年」になったのではないかと思います。さらには時代に合わせた新たな取り組みも増えてきたと感じています。今後も体育会本部の後輩たちが「成蹊大学体育会、さらには成蹊大学を発展させたい」という想いを引き継ぎ、活動に取り組んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



寄稿 第72代体育会本部委員長 砂川桂一郎

新年度体育会本部委員長抱負を語る **NEW!!**



新年度体育会本部委員長を務めさせていただきます、比嘉健也と申します。

新年度の体育会本部は2つの目標を掲げ、活動に取り組んでまいります。

1つ目は、横の繋がり強化です。昨年度は新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いたことで、成蹊レガッタ、学内運動競技大会、四大戦など制限を設けながら行事を開催することができました。新年度は制限を緩和した学内行事や新しいイベントを企画し、団体同士で交流できる機会を多く設けていきたい

と考えております。

2つ目は、四大戦総合優勝です。新年度の四大戦は、成蹊大学で開催されます。そのため、正式種目、一般種目において優勝を目指し、成蹊大学らしい四大戦を作っていきたいと考えております。

これからも体育会本部は、成蹊大学体育会のさらなる発展に向けて努めてまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



寄稿 第73代体育会本部委員長 比嘉健也

体育会少林寺拳法部について **NEW!!**



成蹊大学少林寺拳法部は1968年に愛好会として創設されました。1973年には関東学生大会で優秀賞を取るなどの実績を上げ、1974年に同好会に昇格しました。さら1975年には部に昇格し、体育会の仲間入りをしました。その後も関東学生大会や全日本学生大会で数々の賞を獲得しています。

少林寺拳法の大会は2人1組で予め決めておいた技を互いに出し行う演武により行われ、突き、蹴り、投げ技の正確さ、スピード、迫力などで採点されます。一方、運用法と呼ばれる競技形式もあります。これは、いわゆる乱取りで、防具を付けて技を自由に出し合い、有効な技がポイントとなります。

成蹊大学少林寺拳法部の伝統は、実戦での強さを求めるところにあります。1975年には全日本学生大会の乱取りの部で優秀賞を獲得し、1983年には他流派の硬式空手の世界大会に出場し、3位に入賞した部員に成蹊大学体育会から優秀個人賞が授与されました。また、1986年に少林寺拳法の総本部で開催された大学対抗乱取り大会で優勝しました。

しかし、少林寺拳法は強さだけを追求する格闘術ではなく、護身のための武道です。自分からは先に攻撃せず、相手の攻撃から自分自身の身を守るという「守主攻従」という考え方にに基づき、技が構成されています。少林寺拳法の技は、空手のような突き蹴りによる剛法と柔道や合気道のように関節を極めて投げる柔法で構成され、技を極めれば、小柄で筋力の弱い人でも自分の身を守る術を身に付けることができます。

たとえ大会で良い成績を残すことができなかつたとしても成蹊大学少林寺拳法部の部員は「自分と大切な人を守ることができる」という確かな自信を身に付けて社会に出ることができます。



近年はコロナ禍の影響もあり、部員が減少しており、現在の部員は6名となっています。しかし、少林寺拳法の良さを上手く伝えることができれば、また部員が増え、活発に活動できる日が来ると信じています。

寄稿 少林寺拳法部 OB会 会長 松田真一（88年文卒）

應援指導部からの報告 **NEW!!**



應援指導部援蹊会（應援指導部 OBOG 会）で幹事長を担っております、深澤です。

最近はずっと活動しているチアリーダー部と部員のいないリーダー部という状況が数年続いておりました。そんな中、二名のリーダー部希望者がきましたのでご報告致します。

應援指導部は体育会本部直属の部として、体育会のみならず、成蹊大学全体を盛り上げていくという使命があります。目標が漠然としており、試合や大会もなく、加盟団体にも所属していない、仮に加盟していても大学独自の流儀なので、指導者が OB に

限られているという状況です。その為、途切れると復活が非常に難しくなります。そんな中で、現在三年生と一年生が入ってくれた事は個人的には非常に嬉しく、そして稀な事だと思っています。

そもそも成蹊大学應援指導部は空手道部の有志を中心に集まり、その中でいろいろと進化し、現在に至るので、空手の型の影響を受けている事くらいしか分かりません。寮歌も歌詞は同じですが、音程は旧制の方々が歌うものより重く暗いイメージです。

そして、應援指導部は独善的と言われるますが、その通りの部分も多いです。ただ、現役時代に教えられた事は奉仕の精神であり、文字通りの一生懸命であり、ジャイアニズムの逆、応援に行ったら試合に勝てばプレイヤーの努力、負ければ声援が足りなかったからというもので、個人的には素晴らしいと考えていました。それには背景もあります。セレクションのメンバーが体育会にいないという部分は大きいです。そのメンバーに対して、甘く見られる事があってはならないというのが、根底にありました。そして、他大学の応援団にもその考え方は適用されていきます。

校旗を預かり、校歌の指揮を執る為に、日常から絶えず緊張感を保ち、効率とは無縁な精神論のみの練習を繰り返す事によって、努力をしている体育会各部に頑張れと言える部という話を聞かされて、実践してきました。

その為、過去には他大学との諍いがあった事もありましたが、それは上記の考え方が影響しています。現在はハラスメントにならないように気を付けながら、活動に勤しんでもらいたいと考えておりますが、皆様の中でも良く思われていない方もいるであろう應援指導部は、上記のような考えで行動してきました。

今後はご迷惑をお掛けすることなく、その使命を全うできる組織を目指していきたいと考えております。

寄稿 応援指導部 OB会 幹事長 深澤卓（00経卒）



チアリーダー部からの報告 **NEW!!**

近年、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、活動の様々な側面で制限があり、応援活動やイベントへの参加が減少しておりました。しかし、今年度はスポーツイベント等が、従来の形態に戻りつつあり、応援指導部としての活動機会もコロナ前と同等に回復し始めています。今年度は特に多方面からご依頼をいただき、幸いにも多くの活動機会もいただきました。体育会の応援や大学の行事に限らず、小学校の行事や地域のイベント等にも

参加させていただきました。関係者の皆様には、この場をお借りし、感謝申し上げます。

コロナ禍で学校行事に参加したことがない部員がほとんどの状況の中、これまでOB・OGの方々が築いてきたご縁を引き継ぎながら、応援活動や地域の活動を頑張っています。引き続き、応援指導部チアリーダー部がお力になれる機会がございましたら、お声がけいただけますと幸いです。

さらに、今年度は、JAPAN RUGBY LEAGUE ONE Division2の日野レッドドルフィズさんとのご縁で、応援演技をさせていただきました。勝利に向けて応援することは、もちろんですが、観客と一体になり



ゲームを作り上げるのが、スポーツイベントの醍醐味です。選手への応援だけでなく、ファンの方や地域に元気や勇気を与え、JAPAN RUGBY LEAGUE ONEのMissionの1つである、「地元の結束、一体感の醸成」に応援指導部チアリーダー部も少しでも貢献できればと思っております。

また、この2年リーダー部は不在でしたが、今年度2人入部し、OBの方からご指導をいただいております。さらに、チアリーダー部は、応援活動だけでなく、チアリーディング競技にも日々励んでおります。来年も変わらず、さらなる高みを目指し、学園や地域貢献ができるよう励んで参ります。OB・OGの皆様をはじめとする関係者の皆様には、引き続きご指導・ご支援の程、よろしく願い申し上げます。

寄稿 応援指導部チアリーダー部 監督 竹澤美郁 (19年卒)

硬式庭球部男子が4部に昇格



2022年度関東大学テニスリーグ(8月30日～9月25日開催)において、硬式庭球部(男子)が4部に昇格をしました。

関東大学テニスリーグは、今年で第76回(女子は58回)となる大会で、体育会硬式庭球部にとっては、ここで上位の成績を残すことが男女ともに最大の目標です。男子は2016年度に入替戦6回目のチャレンジで3部に昇格しましたが、その後、選手の入替わりや、コロナ禍で大会が中止になるなどで、5部の位置まで下がっていました。

男子のリーグ戦は、ダブルス3組、シングルス6名の計9ポイントで競います。2022年度は1年生を含む若いチーム編成であり、試合経験の少なさからか5月の四大戦では結果が出せず、リーグ戦に向けて不安を残していましたが、監督・コーチをはじめ若手OBによる実践的な強化練習や、基礎トレーニングの積み上げにより、リーグ戦の前までに個々の実力がかなり向上してきました。

リーグ戦が始まってからは、初戦で帝京大学に5対4で競り勝ったことが弾みとなり、続く明治学院大学戦で6対3、横浜国立大学戦で7対2、東京学芸大学戦は6対3で勝利をして勢いに乗りました。最終戦の国士舘大学戦では、4対5と星を落としましたが、総合成績1位となり、入替戦の関東学院大学戦では5対0(途中打ち切り)と上位のチームを圧倒して、見事4部に昇格することができました。

試合を重ねるごとに、チームの一体感が増し、逞しくなっていく現役の姿にOBとして誇らしい気持ちになりました。大学スポーツは1年ごとに選手が入替わり、強化が難しい面がありますが、目標である関東大学テニスリーグ3部の位置の定着に向けて、引き続き応援をしていきたいと思っております。

寄稿 成蹊テニス会 江橋治郎(79年法卒)

2022年度助言委員会報告

11月29日（金）2022年度第1回助言委員会が開催されました。委員会には、御厨会長、江橋委員、オプザーバー小町事務局長が参加しました。

委員会で使用した資料は、GougleDrive フォルダー「2022助言委員会」(https://drive.google.com/drive/folders/15pywlGAXevFnJBTYvqdSqFVCb8PseRQH?usp=share_link)で閲覧できます。詳細は、事務局まで連絡ください。

寄稿 OBOG 会長会 副会長 木村明彦（69年政経卒）

リーダーシップセミナー開催

12月18日（日）17:00～リモートにより 坂井伸一郎氏によるリーダーシップセミナーが開催されました。OB 会長会からは、8名の方々が参加しました。学生がどのようなセミナーを受けているのか取り巻く環境はどのように変化しているのか身近に知ることもできます、OB 会長会のより多くの方々の参加が望まれます。

寄稿 OBOG 会長会 副会長 木村明彦（69年政経卒）

事務局からの「今年を振り返って」

コロナ感染症の影響を3年間受けてきました。OBOG 会内や学生間ともに思うように会合を開けず、試合観戦や練習見学をも現地に行かれずやきもきした時を過ごしてきた OBOG の方々も多かったと思われます。

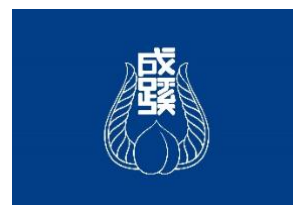
そのような中でも SMAnews 32号では沢山のクラブの優秀な成績を報告することができました。体育会本部新旧のご挨拶も掲載できました。**NEW!**として初めてクラブ紹介をいただいたクラブもあります。広報担当事務局からではなく、自ら掲載希望と声がかかるようになったことが大変喜ばしいことです。

クラブの活動をPRすることは自分たちの外の世界を知り相互に刺激しあっていくことであり OBOG も学生も同様に活性化に繋がります。

また、10月1日に開催した「OBOG 連合会に向けての説明会」に対するアンケートには38団体から回答をいただき、誠にありがとうございました。アンケートをもとに今後世話人会として議論を重ね、新年度には皆様にご提案する所存です。

今年もこれまで応援いただいた皆様方に感謝申し上げます。ありがとうございます。来年も良い年を迎えられますようお祈り申し上げます。

OBOG 会長会 副会長 木村明彦（69年政経卒）



Information 重要なお知らせ

■お知らせ

- 次号 SMAnews 33号（1月～3月）は、1月25日頃発行予定です。各クラブの活動状況のアピールのためにこの紙面を活用ください。

掲載責任者 木村明彦